

久助君の話きゆうすけくん

新美にいみ 南吉なんきち

久助君は、四年から五年になるとき、品行方正ひんこうほうせいのほうびをもらってきた。学術優等がくじゆゆうとう

はじめて久助君がほうびをもらったので、電気会社の集金人であるお父さんは、ひじょうにいきごんで、それから、久助君が学校から帰ったらすぐ、一時間勉強することに規則きそくをきめてしまった。

久助君はこの規則を喜ばなかった。一時間たって、家の外に出てみても、近所に友だちが遊んでいないことが多いので、そのたびに友だちをさがして歩かねばならなかったからである。

秋のからりと晴れた午後のこと、久助君は柱時計が三時半をしめすと、「ああできた。」と算術さんじゆつの教科書をぱたツとじ、机つくえの前を立ちあがった。

そとに出るとまばゆいように明るい。だが、やれやれ、今日きょうも仲間なかまたちの声は聞こえない。久助君はお宮の森の方へ耳をすました。

森は久助君のところから三町ははなれていたが、久助君はそこに友だちが遊んでいるかどうかを、耳で知ることができたのだった。だが、今日は、森はしんとしていてうまい返事をしない。つぎに久助君は、ほんたいの方の夜学校のあたりに向かって耳をすました。夜学校も三町ばかりへだたっている。だが、これもよい合図を送らない。

しかたがないので久助君は、彼らかれらの集まっていそうな場所をさがしてまわることにした。もうこんなことが、なんどあったかしれない。こんなことはほんといやだ。

さいしよ久助君は、宝蔵倉ほうぞうくらの前にいつてみた、多分の期待を持つて。そこでよくみんなはキャッチボールをするから。しかしきてみると、だれもない。そのはずだ、豆まめが庭いっぱいにほしてある。これじゃ何もして遊べない。

そのつぎに久助君は、北のお寺へいった。ほんとはあまり気がすすまなかったのだ。というのは、そこは別の通学団つうがくだんの遊び場所だったから。しかしこんなよい天気の日にとりて遊ぶよりはましだったので、いったのである。がそこにも、丈たけの高いはげいとうが五六本、かつと秋日にはえて鐘撞堂かねつぎどうの下に立っているばかりで、犬の子一ぴきいなかった。

まさか医者の家へなんか集まっていることもあるまいが、ともかくのぞいてみようと思つて、黄色い葉のまじった豆畠まめばたけのあいだを、徳一君とくいちくんの家の方へやつていった。その途中、ほし草のつみあげてあるそばで兵太郎君たろうくんにひょっくり出会つたのである。

兵太郎君はみんなからほら兵とあだなをつけられていたが、まったくそうだった。こんな鰻うなぎをつかんだといつて両方の手の指で天秤棒てんびんぼうほどの太さをしてみせるので、ほんとうかと思つていつてみると、筆ぐらいのめそきんが、井戸ばたの黒いかめの底にしずんでいふうである。またみんなが軍艦ぐんかんや飛行機の話をしていふと、おれが武豊たけとよでみたのは、といつて、べらぼうなことをいい出すのだった。また兵太郎君は音痴おんちで、君が代もろくろく歌えなかったが、いっこうそんなことは気にせず、みんなが声をそろえて軍艦マ―チをやっていると、すぐ唱和するので、みんなは調子が変になつて、やめてしまふのであつた。だが、わる気はないのでみんなにきらわれてはいない。ときどき鼻をすこし右にまげるようにして、きゅつと音をたててすいあげるのと、笑うとき床ゆかの上だろが、道の上だろが、ところきらわず下にころがる癖くせがあつた。体操たいそうのとき、久助君のすぐ前なので、久助君は彼の頭

のうしろ側にいくつ、どんな形の、はげがあるかをよく知っている。

兵太郎君は、てぶらで変にうかぬ顔をしていた。

「みんなどこにいったか知らんかア。」

と久助君がきいた。

「知らんげや。」

と兵太郎君が答えた。そんなことなんかどうでもいいという顔をしている。丸太棒のはしを大工さんのみで、ちよつちよとほってできたようなその顔を、久助君はまぢかにつくづくとみた。

「徳一がれにいやひんかア。」

と、久助君がまたきいた。

「いやひんだらア。」

と、兵太郎君が答えた。赤とんぼが兵太郎君のうしろを通って行って、ほし草にとまった。そのはねが陽の光をうけてきらりと光った。

「いってみよかよオ。」

と、久助君がじれったそうにいった。

「ううん。」

と兵太郎君はなまへんじをした。

「なア、いこうかよオ。」

と、久助君はうながした。

「んでも、徳やん、さっきおっ母ンといっしよに、半田の方へいきよったぞ。」

と、兵太郎君は行って、強い香をはなっているほし草のところに近づき、なかばころがるようにもたれかけた。

久助君は、徳一君のところにも仲間たちはいないことがわかって、がっかりした。が兵太郎君の動作をみると、きゆうに、ここで兵太郎君とふたりきりで遊ぶ、それでもじゆうぶんおもしろいという気がわいてきた。ほし草のつのであるところとか、藁積のならんでいるところは、子どもにはひじょうにたくさんのお楽しみをあたえてくれるものだ。そこで久助君も兵太郎

君のそばへ行って、自分のからだを、ゴムまりのようにほし草に向かつて投げつけた。ほし草はふわりと、やわらかに温かく久助君をうけとった。とたんに、ひちひちと音をたてて、ぱったが頭の上から豆腐の方へ飛んでいった。

久助君は、頭や耳に草のすじがかかったが、とうとうしなかった。ほし草の山は昼間じゅう太陽に温められていたので、そこにもたれかかっていると、お母さんのふところにだかれていたじぶんを憶い出させるようなぬくとさだった。久助君は猫のようにくるいたい衝動が体の中にうずうずするのを感じた。

「兵タン、相撲とうるかやア。」
と、久助君はいった。

「やだ。昨日相撲しとって、袖ちぎって家でしかられたもん。」

と、兵太郎君が答える。そして膝を貧乏ゆるぎさせながら、あおむけに空をみている。

「んじゃ、蛙とびやるかア。」

と、久助君がいう。

「あげなもなおもしろかねえ。」

と、兵太郎君は一言のもとにはねつけて、鼻をきゅつと鳴らす。

久助君はしばらくだまっていたが、ものたりなくしてようがない。ころろと兵太郎君の方へころがり近づいていって、草の先を、あおむいている兵太郎君の耳の中へ入れようとした。

兵太郎君はほらふきでひょうきんで、人をよく笑わせるが、こういう種類のからかいはあまりこのまない。自尊心が傷つけられるからだ。

「やめよオツ。」

と、兵太郎君がどなった。

兵太郎君がおこって久助君に向かつてくれば、それは久助君ののぞむところだった。

「あんまり耳くそがたまつとるで、ちょっと掃除して

やらア。」

といって、久助君はまた草の先で、兵太郎君の頭にペしゃんとはりついた耳をくすぐる。

兵太郎君はおこっているつもりであつたが、くすぐったいのでとつぜんひあつというような声をあげて笑いだした。そして久助君の方にぶつかつてきた。

そこでふたりは、おたがいが猫の仔のようなものになつてしまったことを感じた。それからふたりは、ほし草にくるまりながら、上になり下になりしてくるいはじめた。

しばらくのあいだ久助君は、冗談のつもりでくつていた。相手もそのつもりでやっていることだと思つていた。ところが、そのうちに、久助君は一つの疑問にとらわれた。どうも相手は本気になつてやうっているらしい。久助君を下からはねのけるときに久助君の胸をついたが、どうも冗談半分の争いの場合の力の入れかたとはちがつている。また、久助君を上

からおさえつけるときの、相手のやせた腕がぶるぶるとふるえている。冗談半分ならそんなことはないはずである。

相手が真剣なら、此方も真剣にならなきゃいけない、と久助君はそのつもりになつて、一生懸命にやりだしたが、そうするうちにまもなくまたつぎの疑問がわいてきた。やはり兵太郎君は冗談半分と心得てくるっているらしい。久助君の手が、あやまって相手の脇の下から熱っぽいふところにもぐりこんだとき、兵太郎君はクククツと笑つたからである。

相手が冗談でやっているのなら、此方だけ真剣でやうっているのは男らしくないことなので、此方もそのつもりになろうと思つていると、まもなくまた前の疑問が頭をもたげる。

二つの疑問が交互にあらわれたり消えたりしたが、ふたりはともかくくるいつづけた。

久助君は顔をほし草におしつけられて、ほし草をく

わえたり、ほし草があるつもりでひっくり返ったところにほし草がなくて、頭をじかに地べたにぶつけ、じーんと頭中が鳴りわたって、熱い涙がうかんだりした。

また、しっかりと、複雑に、手足を相手の手足にからませているときは、自分と相手の足の区別などはつきりつかないので、相手の足をおさえつけたつもりで、自分のもう一方の足をおさえつけたりしていることもあった。

とつくみ合いは夕方までつづいた。帯はゆるみ、着物はだらしなくなってしまう、じっとり汗ばんだ。

何度目かに久助君が上になって兵太郎君をおさえつけたら、もう兵太郎君は抵抗しなかった。ふたりはしいんとなってしまう。二町ばかりはなれた路を通るらしい車の輪の音がからかと聞こえてきた。それはじめて聞いたこの世の物音のように感じられた。その音はもう夕方になったということを久助君に知らせ

た。

久助君はふいとさびしくなった。くるいすぎたあとに、いつも感じるさびしさである。もうやめようと思った。だがもしこれで起ちあがって、兵太郎君がベソをかいていたら、どんなにやりきれぬだろうということを、久助君は痛切に感じた。おかしいことに、とつくみ合いのあいだじゅう、久助君はいっぺんも相手の顔をみなかった。いまこうして相手をおさえていながらも、自分の顔は相手の胸の横にすりつけて下を向いているので、やはり相手の顔はみていないのである。

兵太郎君は身動きもせず、じっとしている。かなり早い呼吸が久助君の顔につたってくる。兵太郎君はいったい何を考えているのだろう。

久助君はちよつと手をゆるめてみた。だが相手はもうその虚に乗じてはこない。久助君は手をはなしてしまった。それでも相手は立ちなおろうとしない。そこで久助君はついに立ちあがった。すると兵太郎君もむ

つくりと起きあがった。

兵太郎君は久助君のすぐ前に立つと、何もいわないで地平線のあたりをややしばらくながめていた。なんともいえないさびしそうなまなざしで。

久助君はびっくりした。久助君のまえに立っているのは、兵太郎君ではない、みたこともない、さびしい顔つきの少年である。

なんということか。兵太郎君だと思いこんで、こんな知らない少年と、じぶんは、半日くるっていたのである。

久助君は世界がうらがえしになったように感じた。そしてぼけんとしていた。

いったい、これはだれだろう。じぶんが半日くるっていたこの見知らぬ少年は。……

なんだ、やっぱり兵太郎君じゃないか。やっぱり相手は、ひごろの仲間の兵太郎君だった。

そうわかって久助君はほっとした。

だが、それから久助君はこう思うようになった。――わたしがよく知っている人間でも、ときにはまるで知らない人間になってしまいうことがあるものだ。そして、わたしがよく知っているのがほんとうのその人なのか、わたしの知らないのがほんとうのその人なのか、わかったもんじゃない、と。そしてこれは、久助君にとって、一つの新しい悲しみであった。

きゅうすけくん 「久助君の話」

※『新装版 新美南吉童話集 2 おじいさんのランプ』（2012 年 12 月 1 日、大日本図書株式会社）の「久助君の話」をもとに一部、漢字表示とルビを編集しました。

※このテキストを個人的に読む以外の利用をされる場合には、新美南吉記念館までご連絡ください。
(TEL：0569-26-4888)